

発育発達専門領域

田中茂穂 (女子栄養大学・教授)

1. あらまし

日本体育学会発育発達専門分科会（日本体育・スポーツ・健康学会 発育発達専門領域の前身）を母体として、2002年10月に「日本発育発達学会」が発足した。会員数は、777名（2024年2月末時点）で、発育発達専門領域に所属する者と学会のみに所属する者が半々となっている。学会誌として、「発育発達研究」

（<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/hatsuhatsu/-char/ja/>）（1990年以前は「発育発達専門分科会通信」）、機関誌として「子どもと発育発達」（杏林書院）を編集発行している。「子どもと発育発達」は特集記事を中心としつつ、最近は「発育発達研究のための統計セミナー」および「近接領域学会の研究動向」の2つの連載を含んでいる。こうした歴史については、「子どもと発育発達」の特集記事の中で紹介されている¹⁾。

年次学会は3月に開催しており、発表された演題の中から「優秀研究賞」を選ぶとともに、評価の高い演題は「発育発達研究」に投稿するよう勧めている。

2. 内外の研究動向

日本体育学会発育発達専門分科会としているだけあって、体育学や運動・スポーツ、体力関連の論文・学会発表の割合が大きい。しかし、「身体活動」の中でも「遊び」の比重が大きく、「座位行動」に関する論文等も増えてきている。

また、身体活動に限定せず、他教科を含む教育学全般、小児科学、自然人類学・文化人類学、測定評価など幅広く展開しようとしているのも本学会の特徴である。例えば、2024年の第22回の年次大会では、発育発達学における疫学研究をシンポジウムで扱っている。また、機関誌「子どもと発育発達」の2023年度以降（第21巻～）の特集タイトルは、「子どもの資質・能力と身体活動」「心身の健康、遊び、運動、生活習慣、環境から人の発育発達を考える」「運動・スポーツ、遊びを通した子どもの育み」「教育実践研究における「リアリティ」の所在～計量的分析と質的分析の相補性に着目して～」「発育発達を促す特別支援教育」「子どもとジェンダー」となっており、体育や運動・スポーツの枠を超えた内容を扱っている。2016年の「子どもと発育発達」の特集^{2,3)}では、発育発達研究の課題について、当時の理事など十数人が、それぞれの観点でまとめている。

3. 科学的知見の応用の状況

文部科学省「幼児期運動指針」（2012年）⁴⁾の策定時には、策定委員会委員長と副委員長を当時の日本発育発達学会会長と理事長が担い、策定委員会やワーキンググループの約

2/3 を本学会の会員が占めた。当然ながら、その内容は学会の成果がふんだんに盛り込まれていると同時に、その策定の過程および策定後に見いだされた新たな課題についても検証が続いている。

4. 学校体育や大学体育に活かすべき知見

発育発達学に関わる日本の研究者の多くは、幼稚園や保育所、学校やスポーツ団体などの現状を踏まえ、それらの現場から資料を収集している。したがって、得られた知見も現場に還元できるものがほとんどである。例えば、発育発達の評価法、遊びの場の提供や運動指導の方法、体力向上や身体活動促進につながる学校・地域・家庭環境などが主要なテーマとなっている。また、体力要素別にみたトレーニングの至適年齢に関する模式図が指導者養成の講習会や各種教科書などで利用されているが、今から 50 年以上前の形態発育や体力の発達の平均像に基づいたものである。当時より早熟化が進んでいる現代にあった再検討の必要性も提案されている⁵⁾。

これらの成果は、学会誌「発育発達研究」をはじめとする専門誌で公表されている。最近では、優れた成果が国外の英文誌で公表されることも多くなっている。また、機関誌「子どもと発育発達」では、科学的知見と教育現場での応用についての特集が毎号組まれており、体育現場で活用できる知見が数多く紹介されている。

5. 若手研究者へのメッセージ

発育発達学会および発育発達専門領域の特徴の一つとして、女性の会員が多いことが挙げられる。学会発表の筆頭著者の約半数は女性であり、12 名の理事（2024 年度時点）のうち、女性が 5 名を占めている。若手が比較的多いのも特徴である。

子どもを対象とした研究では、倫理上および実施上の制約が多い。また、約 20 年間にわたる発育発達を把握するには、理想的には個人を長期的に追跡するとともに、個人間差を考慮する必要がある。もちろん、一断面での分析から得られる知見もたくさんある。現実的には両者を併用し、測定評価も専門とする学会員の力を活かしつつ、「個人間差を考慮しながら発育発達をとらえる」という壮大なテーマにじっくりと取り組みたい。

6. 引用文献

- 1) 大澤清二：日本発育発達学会の 20 年とこれから. 子どもと発育発達. 20(3), 193-199, 2022
- 2) 特集「21 世紀における発育発達研究の課題をめぐって 1～発育発達学をどう探求するのか、私の研究とそのフレームワーク～」. 子どもと発育発達. 14 (1), 2016
- 3) 特集「21 世紀における発育発達研究の課題をめぐって 2～発育発達学をどう探求するのか、私の研究とそのフレームワーク～」. 子どもと発育発達. 14 (2), 2016
- 4) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会：幼児期運動指針ガイドブック ～毎日、楽しく体を動かすために～. 文部科学省, 2012
- 5) 大澤清二：最適な体力トレーニングの開始年齢: 文部科学省新体力テストデータの解析から、発育発達研究. 69, 25-35, 2016

(2024 年 5 月 17 日執筆)